

生成 AI に関連する著作権等の諸問題について —法改正と社会動向の調査を中心に—

山本剛大

この数年で AI は驚異の速度で進化している。2021 年に米国 OpenAI 社から発表された画像生成 AI を皮切りに様々な生成 AI が開発され、現在では対話型生成 AI の ChatGPT を中心に、それぞれの分野に大きな影響を与えている。

この新しい技術は、人間よりも早く大量に成果物を作り出すことができるが、知的財産権上の問題や、その技術の継続性、誤情報の提示、クリエイターへの影響など、様々な問題が発生している。

生成 AI のシステムは、インターネットに存在する膨大な量のデータを学習し、新たな成果物を生成するものである。その学習プロセスと生成される成果物の法的位置付けは、現行の著作権法上では定められているものの、生成 AI に対して規制を強化すべきという声が挙がっている。

本論文では、AI 生成物の著作権問題を主題としつつ、関連する問題について調査、考察を行った。AI 生成物の著作権問題と、その他様々な関連するリスクや問題について明らかにし、今後の生成 AI との関わり方について検討した。

生成 AI と著作権の関係では、現在の生成 AI の開発/利用の仕組みは一般の著作物の著作権を侵害しており、それら既存の著作物に対して保護ができていないため、法規制が必要である。形式としては従来の著作権の仕組みにとらわれない、「生成 AI と著作権」に関する独自の法規制が必要であると考えた。

著作権以外の権利を侵害するものと、生成 AI 自体が抱える問題については、それぞれ制度や法律の改正によって解決できるものと、技術的な対処によって解決できるものがある。個々の具体的な問題に対して、どのような対処によって解決が行えるかの検討を行った。

論文全体の結論としては、現実の生成 AI の利用状況に対応した将来的な仕組みづくりと、コンテンツとクリエイターの保護を主張する。生成 AI は日々進化を続けるとともに、私たちの生活に大きな影響をもたらしている。その中には従来の技術では発見することができなかった歴史的な成果を生み出すものもあれば、結果として人の命を奪ってしまったものも存在する。また、コンテンツクリエイターにも様々な影響を与えている。コンテンツを無断で学習する生成 AI は、従来著作権によって保護されてきたコンテンツの在り方を大きく歪めている。これらに対して一括りに規制を行う必要は無いが、個々のリスクに応じた具体的な法規制と、生成 AI による利益弊害について社会全体が向き合っていく必要があると考える。

(指導教員 高良 幸哉)